

# Café des open

## 三浦一族



### Menu 第6回

## 源実朝暗殺の黒幕は三浦義村？

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

鎌倉幕府最大の内紛となった和田合戦から6年後、またも鎌倉で幕府の根幹を揺るがす大事件が起きます。3代将軍源実朝の暗殺です。この事件は、従来から複数の黒幕説の存在が指摘されてきました。その1つが三浦義村黒幕説です。今回は、これを含めた源実朝暗殺をめぐる代表的な説について紹介します。

まず、事件の概要を振り返っておきましょう。建保7年（1219）1月27日、源実朝は、右大臣拝賀のため鶴岡八幡宮に参詣します。拝賀式が終わり、退出していたところ、2代将軍源頼家の子で当時鶴岡八幡宮の別当（長官）であった公暁（こうきょう/くぎょう）が石段の

側から現れ、実朝を斬殺しました（享年28）。公暁は、自身の門弟であった駒若丸（三浦義村の子、のちの光村）の縁を頼り、義村に使者を送り、自らが幕府の長になったことを宣言します。義村は、公暁に迎えの者を送ることを伝える一方で、北条義時にも使者を送り、この件を知らせました。義時は、直ちに公暁の誅殺を命じたため、義村は配下の長尾定景（ながおさだかけ）を討手として差し向けます。定景は、途中で西御門の三浦邸に向かって公暁と遭遇し斬り合いとなり、公暁の首を取りました（享年20）。こうして、僅かな間に源頼朝の血を受け継ぐ者たちが次々に殺害される異例の事態となったのです。

しかし、この事件には、もう一人実朝とともに殺害された人物がいました。それが、拝賀式に参列していた源仲章（みなもとのなかあきら）という人物です。『吾妻鏡』によれば、式の直前、御剣役（ぎょけんやく）として出席予定であった義時が体調不良となったため、その代役として急遽仲章が参列することになったといえます。こうしたことから、義時は事前にこの場で実朝の暗殺が行われることを知っており、あえて体調不良を理由に行列に加わらなかったのではないかと考えられました。これが、北条義時黒幕説です。事件後、義時は公暁の誅殺を命じていますが、実朝の殺害だけでなく、そこまでも含めて綿密に計画されており、義時は一挙に源家の断絶を狙ったとされています（※1）。

一方、義村こそ黒幕で、実朝や義時を殺害し、自らが乳母夫（めのと）として養育してきた公暁を将軍に立

て、幕府の実権を握ろうとしたとする三浦義村黒幕説も提起されました（※2）。この説の前提は、義村が公暁の乳母夫という点です。そのため、公暁は実朝の殺害後、乳母夫であった義村を頼りますが、計画通り、義時をその場で同時に殺害できなかったことから、義村は公暁とは無関係と態度を一変させ、事の次第を義時に報告した上で、公暁に討手を差し向け殺害したというものです。

こうした黒幕説に対し、近年は、そもそも黒幕などおらず、単に公暁の単独犯行とする公暁単独犯行説を提唱する研究者も増えています。北条義時黒幕説に対し

ては、実朝には子どもがおらず、跡継ぎをどうするのかという問題を抱えており、実朝と義時は共同歩調でこれに対処し、実際に後鳥羽上皇の皇子を連れてこようと動いていたことからすると、義時にあえて将軍を挿げ替える意味などなかった点が指摘されています（※3）。また、三浦義村黒幕説に対しても、義村は和田合戦以降、実朝・義時を支える役割を果たすようになっていたにも

関わらずその視点を欠いていること（※4）、また義村が乳母夫であったのは公暁ではなく実朝ではなかったかという説も提起されており（※5）、義村にも何ら実朝を殺害する理由などなかったことが指摘されています。さらに、『吾妻鏡』の実朝暗殺に関する記事は偽作の可能性が高く、その記事を根拠とするいずれの黒幕説も成立しえないとの指摘もあります（※6）。

このように、最近では、黒幕説に対し否定的な見解も多く、単に公暁が父を殺害した実朝・北条氏への恨み、また、源氏の血を引いている自分の存在があるにも関わらず、自分を差し置いて親王将軍を迎えようとした実朝・義時に対する反発から引き起こした事件と捉える見方が、主流となってきています。

#### （参考文献）

- ※1 安田元久『北条義時』（吉川弘文館、1961年）
- ※2 永井路子『つわもの賦』（文芸春秋、1983年）
- ※3及び※4 坂井孝一『源氏将軍断絶』（PHP研究所、2021年）
- ※5 高橋秀樹『北条氏と三浦氏』（吉川弘文館、2021年）
- ※6 山本みなみ『史伝 北条義時』（小学館、2021年）